

讃美歌第二編

56 Georg Friedrich Händel Messiah No.17(Duet), Part I

1 主はその群れを やしないたもう。
すべてのひつじ 呼びあつめて
みちびきたもう。
まようものをも たずねいだし、
つよくやさしき 腕(かいな)をもて
あいの牧場(まきば)に ともないた
もう、いまも

2 「重荷を負いて なやむ子らよ、
とくわがもとへ かえりこよ」と、
みこえきこゆ。
こころやさしき 主にしたがひ、
くびきを負いて ともにあゆめ、
やすきとさちを あたえたまわん、
とこしえに。

He shall feed his flock like
A shepherd
And He shall gather
The lambs with his arm
With his arm

He shall feed his flock like
A shepherd
And He shall gather
The lambs with his arm
With his arm

And carry them in his bosom
And gently lead those
That are with young
And gently lead those
That are with young

Come unto Him
All ye that labour
Come unto Him, ye
That are heavy laden
And He will give you rest

Come unto Him
All ye that labour
Come unto Him, ye
That are heavv laden

「脱炭素への重圧」

ローマの信徒への手紙8:19-22

「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」

本日の讚美歌は、ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(彼は、英国に帰化したので、英語の綴りは“Handel”)で、ドイツ・ライプチヒに近いハレ出身のオルガニストかつバイオリニストでありました。イタリアのヴェネチアやナポリにも数年滞在して、ドミニコ・スカルラッティとの交流もありました。帰国してハノーファーの宮廷楽長となり、次々オペラを作曲してロンドンにも滞在していたところ、1712年、英国女王の死去で、ハノーファー公が英国王に推挙されたる事件がありました。それを機会に、ヘンデルは英国に帰化しロンドンの「オペラ」界をリードするようになりましたが、次第に、大規模な舞台装置を要しない「オラトリオ」の作曲に集中していったようです。

ペストの発生が少なくなり、ウエストファリア条約が締結され、宗教戦争の危機が下がった17世紀後半以降には、讚美歌の傾向に明らかに変化が生じたと思います。

こうしたなかで、1741年に完成したヘンデルのオラトリオ「メサイア(Messiah)」の第17番は、前半はアルト、後半はソプラノのデュエットとなり、日本の「讚美歌第二編」56番の1番と2番に収録されています。

一般には、「オラトリオ」というと、イエス様の生涯を描いた曲と考えられますが、この「メサイア」の歌詞のほとんどは、メシアの到来を予測した旧約聖書のイザヤ書や詩篇などからとられているのです。旧約聖書の世界では、人間の営みも、被造物全体の偉大な動きの一部にすぎないかのようです。ヘンデルの「メサイア」が描いた世界は、中世後期以降、混乱や戦争を経たキリスト教会の世界ではなく、旧約聖書を通じ、悠久の時の流れに関心が向かった可能性があるとします。

19世紀までにキリスト教会の教義はどんどん固定化し、神様に関する知識を人間が所有したかのような錯覚が強まったかのように私には感じられます。各国の政権に協力するキリスト教会は20世紀に、2回の世界大戦を防ぐことができませんでした。そのことを真剣に自己反省できているのでしょうか。

今世紀、地球環境の急激な変化は、「気候危機 (climate crisis)」と呼ばれるほどの事態を招くなか、聖書に基づき教会が積極的に発言しないことに、私は耐えられません。

私たちの多くは、この5月の連休中に、海や山へでかけると、そこで接した自然の姿に「なんて、綺麗なんでしょう！」という歓声をあげています。私自身もそうでした。

しかし、もしかすると、これはあまりにも一面的な見方かもしれません。人間は、自然の美しい姿だけを賛美し、人間との共生が困難になっている、多様な被造物の悲劇を見ようはしないのです。特に、動物たちの死や、悲しみや、苦しみは人間には見えていなかったのです。動物たちにも、死への恐怖や、家族を思う感情があり、無残な死の姿を残さないために必死に行動していることも、動物生態学者によって、発見されています。それなのに、人類は、これらの動物には、感情も家族への愛もないかのように、毎年数億匹の動物を殺傷しています。

すでに、旧約聖書では、詩篇第19篇には、宇宙及び天体の運行の調和を語っていると同時に、詩篇第29篇は人間の力の及ばない気候と、その強大すぎる力を語っています。併せて旧約聖書は、王国同士の間防と戦乱、自然破壊と飢饉、そして疫病の蔓延を、繰り返し描いてきたのです。

本日読んでいただいている聖書は、新約聖書です。使徒パウロによる「ローマ人への手紙」の第8章です。ルターは「被造物」という用語を、生物 (Kreatur) と、非生物を含む (Schöpfung) に分けて翻訳しました。しかし日本語聖書では、訳し分けられていないので、地球環境への関心の低さと、人間中心主義を懺悔しなければなりません。

地球環境に直接言及する新約聖書のくだりはローマ書が代表格ですが、パウロ書簡にも、ヨハネによる黙示録にも、発見することができます。そこでは、自然又は生き物の悲劇は、人間の危機と切り離せないものであると思われます。

パウロの用いた「滅びへの呪縛」ということばは、地球環境の破壊を、創世記のアダムの上原罪に遡る指摘と理解されるのです。これは、現代の人類が、科学技術文明の名のもとに一方向的に生態系を変え、地球環境や動植物を支配し、開発しようとしたことを想起させるものです。

私が週末に、ある漁村を訪れた時のことです。若年層の人口流出と地域経済の停滞に直面し、豊かな海の恵みと地域の人々の共存を「地産地消」で実現しようとしているのです。漁業協同組合に併設させた地元住民の食堂です。これは基本的に、観光目的としたものではありません。

その食堂の厨房の近くに住民が読んだ地球環境に関する書籍が積まれていました。そのなかで、アメリカ大統領選挙をブッシュ・ジュニアと争ったアル・ゴア氏(ノーベル平和賞を受賞)の『不都合な真実』(2006)の分厚い日本語版がおいてありました。

当時、日米首脳が会談したときに、日本側が『不都合な真実』に言及したのに、米政権側は、あの本はアル・ゴア氏の政治的戦略だと一蹴したという報道もありました。

皆さんには、想像つかないことかもしれませんが、1997年冬に京都国際会館で環境問題が話し合われました。あの「京都議定書」の採択は、人類にとって大事な出来事の一つであったと思っています。私は震災後、西宮周辺に住居を借りられず、たまたま京都の北山から関学に通いました。当時の京都会議の状況を覚えています。

皆さんが思い出されるとすれば、2018年に、スウェーデンで、「気候のための学校ストライキ」を起こした高校生のグレタ・ツンベリーさんのことです。

彼女は、若い世代に対し、「未来がなくなるのなら、あなたは、なぜ勉強するのか」ということまで問いかけています。異常気象は、毎年どこかで起こります。

2015年の国際会議(COP21)で、世界の平均気温を19世紀の産業革命期より2度以上高めないうために、21世紀後半には、温室効果ガス排出量と吸収量を均衡させることを目標として採択しました。

2021年4月にアメリカのバイデン大統領が呼びかけた環境サミットで、2030年までに二酸化炭素排出量を50%削減する「脱炭素」に向けて目標達成が各国から表明されました。しかし、それが、どこまで、どうしたら達成可能か、現時点では全くわかっていません。

そもそも、温暖化効果ガスは、地球の平均気温を14度程度に維持し、生命が生存できる空間を生み出す働きを持っています。温暖化効果ガスは、二酸化炭素だけでなく、メタンやフロンもそうなのです。に参加炭素だけの抑制で、事態が改善するかどうかも、明らかではありません。

気候変動については、「気候危機 (climate crisis)」だけでなく、「気候正義 (climate justice)」という言葉が提起されています。これは先進国が率先して温室効果ガスの発生量を削減するだけでなく、途上国の活動を支援することを求めているものです。

確かに、温暖化効果ガスの最大の排出国であるアメリカと中国において変化は生じています。例えば、電気自動車 (EV)を普及させても、これを生産し、運転する際に使用する電力が化石燃料に依存したままでは、問題は全く解決しません。

知られていないのが繊維産業です。産業革命以来、繊維産業の発展を支えた綿花は大量の水を消費するうえポリエステルやナイロンは、石油製品であって、これを使用する段階でも、細かいプラスチックが下水から海に流出し、生態系への悪影響を与えます。大変なのは、製鉄業です。石炭から生み出したコークスを使用しないで、水素などを原料として、世界のインフラの素材である鉄製品を生み出せるのかどうか。技術革新の目標達成の見通しは不明なままです。

このように、2030年の脱炭素の目標を、部分的な統計数字のつじつま合わせにしても、問題は解決しません。

皆さんは、温室効果ガス削減やプラスチック廃棄物処理の問題を解決することで、人類は22世紀に向けて生き延びられると信じているのでしょうか。

聖書の問うているのは、もっと大きな課題です。それは、人類と被造物(動植物及び地球環境)の間の敵対関係を、どのように和解させるのかということです。

イザヤ書第11章第6節から第9節に描かれた世界が、地球における食物連鎖のシステムと、どこまで両立可能なのか、真剣に議論されたのを知りません。

こうしたなかで、キリスト教会は、地球環境問題に、本当の意味で、真剣に発言しないのです。そのことに、私は日々又は毎週日曜日に、失望を禁じ得ないのです。自分の平安があれば、世界の危機も耐えられるのでしょうか。

私は日々できることから行動しなければ、人類に未来がないと感じます。コロナ危機のなかで、感染リスクへの対応だけでなく、変異株の感染力にも十分な配慮が必要です。そうしたなかで、私たちが、コロナ危機の前の世界に戻ることしか考えていないのであれば、人類の存続は、あと1世紀続くかどうかわかりません。

日本では、先進国のなかで、ワクチンの調達、接種及び生産について、政府が可能な戦略を發動したとは言えません(本年3月刊・エコノフォーラムでも言及しています)。

経済学の視点からも、公衆衛生や緊急医療が経済発展に果たす役割を考慮し、地球環境を含む新たなリスクに立ち向かわねばなりません。

それができないまま、既存の発想法で狭い経済学に明け暮れるなら、経済学への信頼は失われてしまいます。そのことを、私たちは、聖書から学ぶことができます。